

(A五判九六頁 昭和三十三年九月 東京都港区麻布霞町一神
道学会発行 頒価一、五〇〇円)

The Growth and Fluctuation of the British Economy 1790—1850

An Historical, Statistical and Theoretical Study of
Britain's Economic Development, By A. D. GAYLER,
W. W. ROSTOW, A. J. SCHWARTZ Oxford, '53 II
Vol. pp. 1028.

合 田 裕 作

このモニュメンタルな著書は、一九五三年度に刊行されたものであるが、この時代について貴重な統計的研究に貢献した故ゲイヤー氏の仕事を、周知の論文集「十九世紀イギリス経済」の著者ロストウ氏がうけついで、コロンビヤ大学の社会科学研究所成金により、戦前からの計画が実現されたものである。統計的研究としては、コンドラチエフ、ペバリッジ、ホーフマンらの線に沿う仕事であり、物価、貿易、投資、工業、農業、金融、労働等にかんするこの時代についてのえられるかぎりのほとんどすべての統計が集成され、そのおのおのがナショナル・ビューロー・オブ・エコノミック・リサーチの経済時系列分析の方法に厳密に従って整理され、その方法に従ってこの時代の経済変動のスタンダード・パターンが発見が意図

されている。そしてその方法による統計的発見にもとづいて行われる経済的分析の内容は、例えば日本にもよく紹介されているアンヘトンの「産業革命」の終章、「コース・オブ・エコノミック・チェインジ」に要約的にふれられた産業革命の経済史の側面を綿密にとりあつかっている。以上が第二巻。第一巻は、著者の本来意図したように、経済記者的な筆致でもって、各サイクル別にイギリス経済の各分野の同時代の変化を、同時代の観察者の書いた経済記事からの引用を交えながら、追いつける。

統計的な発見に従ってのみ当時のイギリス経済を診断して安全であるほどには、我々は完全な量的知識を持つておられない。いわんや当時の理論家の言葉は、党派的であるに加えて、極度に抽象化された水準において語られたものであることは驚くべきほどである。従つて我々は、当時のその理論家にとつて既知のことであつた同時代的な経済史——経済年代記——が容易に接近できるようなかたちでここに提供されたことをありがたく思う。このような統計的、理論的、歴史的研究の総合によつて、はじめてリアルな理解が我々に可能となるのである。ただ、ふつうの用語法によれば経済史は制度的な変化をその内容とするものであるが、この書物の表題のグロース、長期的変化、は制度的、技術的、社会的変化が直接にこの書物の中で取扱われることを意味しないし、又、理論家にとつて、巨視的動学がここで論ぜられることをも又この標題は意味しない。この語に該当するものを求めるなら、それは長期的趨勢の統計である。所謂長期波動とは区別されているが、どちらかといえばそれに近いものである。この点物足りぬ感を受けるのであるが、経済成長のモデル

に關してなら、この後に刊行された別の著書によつてロストウ氏の意見を知らることが出来ることであるし、制度的記述に關してなら他に従来数多い名著があることであるから、この書物の内容の積極的貢獻を問題にすることにしたい。

短い書評において、章を過つて紹介を行うことは、とくにこのような千頁の大著については不可能である。そこで、はじめに、ここにあつめられた統計について、ついで、NBERの方法一般についてではなく、その方法のこの時代の經濟史に対するこのように忠實な適用の實際的帰結について（日本の兩大戦間の經濟史に対する適用の試みについては、青山秀夫編『日本の經濟變動』について見られたい）、さいごに、經濟記事と統計的発見とをもととして行われた著者の考察のうちから具体例として一つだけをとりだして紹介したい。これは著者が結論において発見され、将来の研究の方向を決定すべきものとして重視して序文中に述べている、新大陸貿易にイギリスの經濟變動を起動する獨立變數たる位置を与えようとするテーゼである。

全くオリジナルな、或は又、この書物の公刊によつて始めて一般に利用されるようになった時系列は、一八一―一八五五の株価の月次統計、一八二〇―一八六八のハイエクの未刊の株価月次統計、卸売物価指数、およびそれらをもととして加工された、事業活動および循環的變動の指數（NBERの方法により不況の底を0とし、主循環のピークを5とする）。しかし新しい指數とはいつても、新しいのはNBERの方法であつて、そのもととされる原統計はペバリッジ、ホーフマン、コンドラチエフ等のそれにはかならずぬ点が見

者に不安を感じさせる。

NBERの方法によれば、基準循環ヒッククレスネイクと個別循環スリットアップとがつくられ、その間のタイム・ラグの型が循環的變動のスタンダード・パターンを明確にするのであるが、とくに歴史家の観点にとつて奇妙に思われるのは、ナポレオン戦争時にも戦後再建期にもこの型が共通する点である。

この方法をつくつたバーンズは經濟の變動がアグレゲートにおいて進行するものでなく、個々の分野の不整合な變動にこそ現実があることを決して忘れておらず、基準循環は個別循環を明瞭にするための道具として作られたものである。ラブルースのフォルスの比較という発想・循環の局面においてこそ經濟構造の變動が最もよく把握される（すなわち、リラティブ・イムボタンスの決定）、シムベターの循環のモデル、經濟の個別分野における革新による變動の起動、などもまた同一の現実を指向するものであり、變動過程における經濟の各分野のリラティブ・イムボタンスが決定されてはじめて具體的な理解が出来たと我々は安心できるのであり、とくにこのためにこそ基準循環と個別循環を區別するNBERの方法は実に強力な武器であるにはかならない。このためにはしかし、たんなる商況の變化が問題ではないのであるから、物価指数だけでは片手落であり、フィジカルな生産指數、投資額、配分所得、個別産業の労働者數等を欠くことは出来ない。問題がリラティブ・イムボタンスであるから、個々の指數相互のあいだの、一種のリーズナブルな換算率が算定されぬあいだは、生のままの原統計の提示が望ましかつた（マイクロフィルムをコロンビア大学に要請することによつてのみ原統計

に接することが出来る。

NBERの方法の適用によるもう一つの帰結は、循環の歴史の主循環マッシーと小循環ケアンクスへの分類である。しかしこの分類法も歴史的に同質な期間に対する適用の場合と異つて、当時のように政治—軍事的攪乱の甚だしいときにおいては、大陸封鎖に伴う在庫変動を小循環と言いかえる必要はなく、当時と今日との信用政策の甚だしい相違において信用恐慌が観察されねばならぬことも言う迄もない。又、流動資本に対する固定資本の比重の急速な増大期（産業革命の後期における慢性的不況に対応する労働節約機械の競争的採用）においては、同一の尺度で以て機械的に主循環（投資活動を伴う）と小循環とを区別することは、経済の実勢にそぐわぬ単純化ではなからうかとの不安が感じられる。

さいごに、新大陸貿易をイギリスの経済変動における独立変数とみる著者の見解に対して、イギリスの国内及び海外投資研究の権威者たるケアンクスは米大陸への輸出——総輸出額の半ばに達することがあり、対欧輸出は比較的稳定——はイギリスの対米クレジットの變動に従属する変数であるとしている（*Ame. Econ. R. Jun. 54*）。一八三二—一八四二のイギリスの景気循環にかんする実に慎重な仕事（*A Study in Trade-Cycle History 1954*）をしたマッシーは対米輸出の變動がアメリカの国内取引の變動したいよりも激しくなると W. B. Smith and A. H. Cole, *Fluctuations in American Business 1790—1860, 1935*. から引用した上で、それを

イギリスの信用政策に起因するとせず、アメリカの景気循環の原因たるよりはむしろその結果であるとしている。マッシーの著書の書評においてフェーターがとりあげたのもこの点にかんしてであったが、フェーターもケアンクス同様イギリスのクレジット政策に起因因を求める側に立ち、御愛顧までに、今日の米経済の世界経済に対する影響力を過去に投射してはならぬと言つている（*J. Polit. Econ. Oct. 54*）。引用ついでにもう一人引用すると、一八四七年の商業恐慌についてはスマートな論評をした C. N. W. パーキンスは、当時においてはビール条令をめぐる党派的对立のため、ことさらファイナンシャルな側面が強調されすぎる傾向があつたとしている（*Oxf. Econ. Paper: Jan. 50*）。これを要するに、経済の個々の分野のリラティブ・イムボタンスの綿密な研究のみが、この問題を解答する堅固な足場を提供するものであるにはかならない。ケアンクスの続けて問う、比較的小さい繊維の輸出額の変動が果して一般的工業活動變動の起動因たりうるか、一般商況の一つの象徴として考えられるか、についてもまた同様である。

以上、若干の希望的意见を述べたが、イギリスの産業革命研究の現段階において、将来における歴史と統計と理論との実り多い結果のための貴重な素材の集成と、新鮮な仮説の提起とが読者に与える恩恵は測りしれないものであり、これがこの書物の本来意図するところであらう。